
魔女ではありません。

悠梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女ではありません。

【Zコード】

Z7344L

【作者名】

悠梨

【あらすじ】

「販売員ではありません」のプレストリーリー的な話。

『魔王』討伐のため、『魔女』に助力を請おうと森にやつて来た『勇者』、ルイエ・マクガルディ。ルディアス・マクガルディのパパとママの話です。

その1

あの日見上げたのは、確かに鉛色の空だったが

何の感慨も無いといえば、嘘になる。

気の遠くなるほど昔から居座り続けた森の外を出て、開けた野原で見上げた空は真っ青だった。

乾燥した風が頬を掠める。耳元の髪の毛と草原の草がそれに揺れて、しゃらしゃらカサカサ鳴った。

少しの間だけ目を閉じる。それが不思議だったのか、隣の彼が問う。

「何十年ぶりの婆婆は、どう?」

「正確には何百年ぶりなんだけどね」

ふくつと大きく息を吐いて答える。目はまだ開けない。

「うーん。このあたりの空気の匂いって、こんなだったかしら?」

「そりや何百年も経てば、少しさは違うんじゃない? 魔女のおばあさん」

「……次にその呼び方したら、氷漬にしてここに放つたらかしにして、森に戻っちゃうわよ」

「スマスマセンデシタ」

彼がくすくすと笑う気配がしたので、ゆっくりと目を開いてみた。

何百年も昔の草原の匂いは結局思い出せなかつたが、今の草原の匂いは気持ちが良い。

ぐぐぐつと縮こまつっていた背筋を伸ばして、大きく欠伸をして気合を入れなおす。

「さて、そんじゃ勇者殿、魔王退治に行きますか!」

「お願ひしますよ~キレイな魔女のお姉さん」

「だから魔女じゃないつーのに

「サイハテの森」の中に『魔女』が棲んでいる。

それは、その街にもう何百年と語り継がれていた伝承だつた。鬱蒼と生い茂る森は昼間でも薄暗い。遊歩道らしき道もあるにはあつたが、それは森から数十メートル程度までしか伸びていない。いや、実際には伸びてはいた、が、誰も先へと行くものが無かつたために荒れ果て、潰えていた。

『魔女』がいつから棲んでいるのかは誰も知らない。だが、彼女がそこに棲み始める前のこの森は明るく、豊かな実りを街にもたらしていたという。

古き民たちはその森で祭りを行い、収穫を祝い神を奉つていたが、『魔女』が棲み始めたことから森は淀み暗くなり、魔物の生息する「サイハテの森」 最果ての森になってしまった。

人々は幾度と無く、魔女退治へと繰り出した。折りしもその当時、『魔女狩り』の盛んな時期で（今でこそ『魔法使い』は重宝されている世の中だが）国を挙げて「サイハテの森」には騎士たちが送り込まれた。

そのたびに返り討ちにされ、森の入り口には大量の騎士たちの屍が投げ打たれていたという。

やがて、人々は森を取り戻すことを諦めた。誰一人として森に近づくものになくなつた。

そして今に至るまで、他国との戦争や革命、魔法使いたちによる反

乱など様々なことが起つ

「人間つて都合よく歴史を改ざんしちゃうからキレイ」

大きな耳を機嫌悪く下に垂れさせて、『魔女』殿のたまつた。

「そもそもあの森はね、人間たちが木を切り倒すわ～動植物を乱獲するわ～で、私が来る前はそれはそれは貧相な森だったのよ」
皺一つ無い、つるつるの肌を軽く高潮させつつ、鼻息荒く。右手の差し指を立てて振りながら、講釈は続いた。

「たまたま『魔女狩り』やら何やら色々あつて、その森に追い込まれた『ちよつと魔力の強い平凡な長寿エルフ』だつた私は、そこにあつた古い小屋に立てこもつて騎士たちの追撃をかわしたけど、別に殺したりなんかはしてないわよ」

ちよ～つと魂もらつただけで、と冗談なんぞを言つてみるが、隣の『勇者』殿が思いつきり引く気配を感じて軽く肩をすくめて見せる。
「ま、それは冗談なんだけどね。で、流石に人間たちも私に恐れをなしたのか森になくなつて。や～つと森が元の状態に再生してきたな～と思つたら、やけに魔物が増えてきちゃつたのよね」
聽けば『魔王』が代替わりして、『三者の均衡』が崩れたつて言つじやない。

私には正直どうでも良かつたんだけど。ていうか、何で私が、私を虐げてきた人間のために『魔王』と戦わなきやいけないのよ。

(もし私のところに来たのがアナタじゃ無かつたら、絶対に森なんか出なかつたのに。)

ぶつぶつと『魔女』殿に、正直ツツ「みたい『勇者』殿
ルイエ・マクガルデは、気づかれないようため息を一つ。
まず、「ちょっと魔力が強い」というのは嘘だ。「ちょっと」と「どこ
ろではない。下手をすれば、世界を壊滅させてしまつほど」の力を持
つていて。

次に、「平凡な長寿エルフ」というのも語弊がある。ちよつとビビ
りではない魔力を有してる時点で、全然平凡ではない。
そしてそもそも「長寿エルフ」という種族自体、現在ではその存在
が確認されていない

と、森を出る前に本人に問い合わせたところ、「昔は集落をなすくら
いには大勢いたのよ」と返された。
もしかしたら、今もこつそりと生きているのかも知れない。

彼女の言葉の中には正直、意味の分からない言葉もあった。
『魔王』の代替わりとか、『三者の均衡』とか。

彼女自身が何を考えているのかも正直よく分からぬ。何とか説き
伏せて森から出て助力してもらえることすら、奇跡のようなもので。
しかし、ルイエにとつてそんなことは些細でどうでも良いことだっ
た。

(今自分がすべき)とは、この『魔女』の助力を得て、父と妹の仇
『魔王』を倒すことなのだから。)

隣で、エルフ特有の腰まである銀色の髪をいじくっている『魔女』ルカ・フォルトを見る。

ぞつとするほど整った無表情。髪と同じ色の切の長いまは伏せられていて、何やら思案に暮れている。

ルカはこちらの視線に気がつくと、まっすぐと皿を合わせた上で一ツコリと笑った。

「ま、仕方ないから少しの間だけアナタに利用されてあげるわ。隠してはいるようだけど、その荒んだ心根には多少同情の余地もあるし」

お見通しとはオソロシイ。さすがは伝説の『魔女』のおばあちゃん、とは心中だけに留めておくことにした。

氷漬の放置プレイなんてのは『ゴメン』である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7344/>

魔女ではありません。

2010年10月9日02時15分発行